

少年少女世界名作全集

日本むかし話集

生源寺美子



主婦の友社版

少年少女世界名作全集 38

日本むかし話集

	生源寺美子
	日本むかし話集 主婦の友社 昭和52年(1977) 162p 22cm 〔分類〕909

筆 者 生源寺美子

発 行 者 石川 数 雄

印刷・製本 凸版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

発 行 所 株式会社 主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台1-6

郵便番号 101 振替 東京2-180番

電話 東京(03)294-1111(大代表)

©1977 落丁・乱丁はおとりかえします。 著者との話しあいにより校印廃止。 }



「聞き^き耳^{みみ}ずきん」で スズメ^{はな}の話^{ごえ}し声^きを 聞いた 男^{おとこ}
は、川^{かわ}のまん中^{なか}に はいってゆきました。すると、ス
ズメがいったとおり、こけの生^はえた石^{いし}が ありました。





うりこひめが 指^{ゆび}三本^{ほん}はいるだけ 戸^とを あけてやると、たちまち 戸^とが からからっと あいて、おそろ



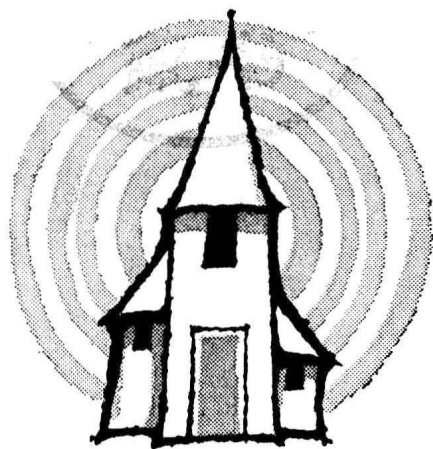
「これだ、このはこの^{なか}に こぞうを かくしたな。」
と、人^{ひと}食^くいおにばばは おきょうのはこを ぎょろり
と にらんで、おしょうさんに いいました。

少年少女世界名作全集

日本むかし話集

文・生源寺美子

絵・石倉欣二



主婦の友社版

デザイン 駒宮録郎
装丁

みなさんへ

むかしばなしは、みなさんの ひいおじいさん ひいおばあさん、
いや、それよりも ずっと前から、くり返し くり返し日本じゅう
に 語りつたえられてきました。ちょっと聞くと、ばかばなし、う
そばなしのように 思えるかも知れませんが、ほんとうは、みんな
人びとの ぐらしのなかから しぜんに生まれた 知えや ねがい
がこめられているのです。

どうか いつまでも つづいていつてほしいと ねがいながら、
わたしは、この八つのお話を えらんで 書きました。

生しょうげんじはるこ源寺美子

もくじ

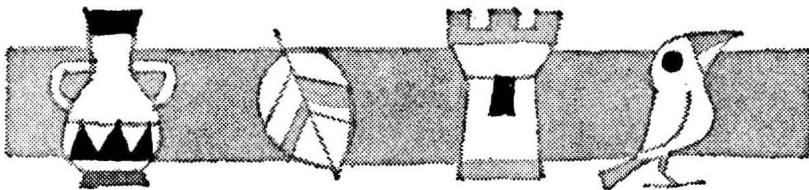
あかんぼうになった おばあさん 10

鳥飲^{とりのみ}みじいさん 21

だいくと おに六 34

うりこひめと あまんじゃく 46

聞き耳^{きみみ}ずきん 65



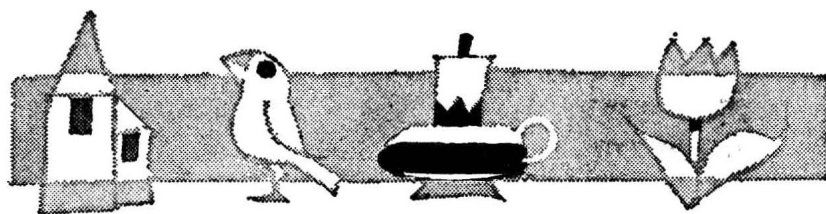
しおふきうす.....82

三まいの おふだ.....104

カモとりじいさん.....128

ことばのまめ知しき.....154

ご両親や先生のための作品解説.....156



赤^{あか}んぼうになつた おばあさん

むかし あるところに、おじいさんと おばあさんがおりました。

ある日^ひ、おじいさんが 山^{やま}へ 炭^{すみ}やきに いきました。

炭^{すみ}を やいていると、あせが たらたら 流^{なが}れてきます。

「きょうは なんて 暑^{あつ}いんだろう。のどが からからだ、どっかに 水^{みづ}が わいていないかな。」

おじいさんは そこいらを 歩^{ある}いて さがしてみました。

しばらくすると、ある 岩^{いわ}かげから きれいな し水^{みず}が こんこんと わいているのを、みつけました。



「これは ありがたい。」

おじいさんは すぐさま 手で すくって

ごくごく と 飲みました。

「うまい うまい、なんて 味のいい 水だろ

う。」

飲めば 飲むほど、いい気分になってきます。

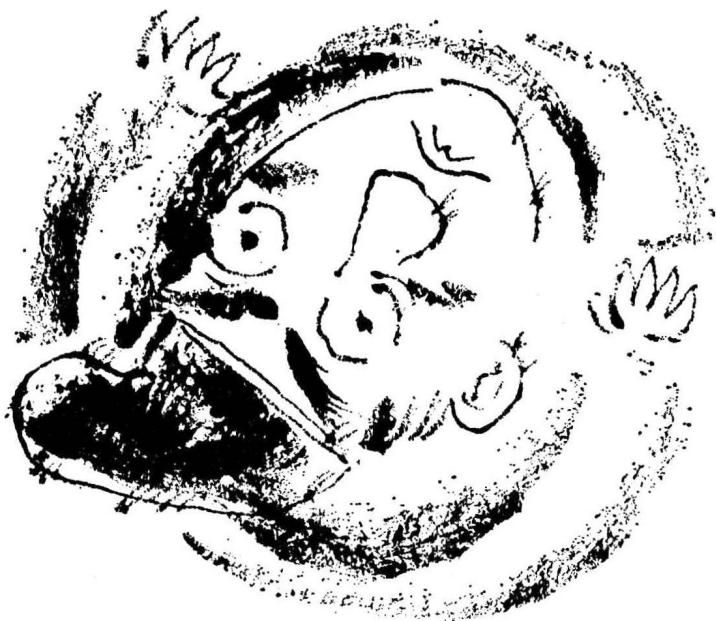
からだじゅうに 力が あふれて でてくる

ようです。

「おやっ？」

おじいさんは 水に うつつた 自分のか

げを 見て びっくりしました。



しわくちやの 顔^{かお}が、すっかり
わ^{もの}か者の 顔^{かお}に なっています。
頭^{あたま}の しらがも 黒^{くろ}ぐろと 光^{ひか}
つて、水^{みず}に うつつています。
いつのまにか、曲^まがった こし
まで しゃんと のびています。
「おやおや、おどろいた。これは
わか返^{がえ}りの 水^{みず}だな。やれ、う
れしやな うれしやな。」
おじいさんは 大^{おお}よろこび。や
いた炭^{すみ}を 軽^{かる}がると しょって、

家へいえ 帰かえりました。

「ばあさんや、いま 帰かえったぞ。」

おじいさんの 声こえを 聞きいて おばあさんが、でてきました。

「おや、きょうは ばかに はやかったね。」

と、おじいさんを 見みあげたとたん、おばあさんは こしを ぬかすほど
びっくりしました。

「ああれ、ま、おじいさん、すっかり わか返がえってるじゃないか。なんだ
って、そんなに 急きゆうに わかくなつたんだえ。」

「うんうん、それはなあ、ばあさんや。」

おじいさんは うれしそうに 話はなしました。

「それは……それは どうした わけだえ、おじいさん。」

おばあさんは、うらやましくて たまらないので、せきこんで たずねました。

「それはなあ、きょうは、山^{やま}で し水^{みず}を 飲^のんだのよ。その し水^{みず}の おかげだよ。とても うまい水^{みず}でなあ、一口^{くち} 飲^のむことに わか返^{がえ}っていくんだ。知らず^しに ごくごく 飲^のんだら こんなに わかくなっていたのさ。」
「うーん。」

と、うなりながら、おばあさんは また つくづくと わかくなった おじいさんを ながめました。そして いいました。

「おじいさん、おまえさんは、なんちゅう うまいことを したもんだ。おまえさんばかり わか返^{がえ}って、このわたしが この ままじゃ、どうにも ならないよ。わたしも 負^まけずに、わか返^{がえ}って みたいもんだ。」

その し水^{みず}は、山^{やま}の どのあたりから わきでているんだえ。」
おじいさんは よく わかるように、し水^{みず}の でる場所^{ばしょ}を、おばあさん
に 教^{おし}えてやりました。

その あくる日^ひ、おじいさんに るす番^{ばん}を たのんで、さっそく おば
あさんは 山^{やま}へ でかけていきました。

